
英雄を導く無限の空

合歎の木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄を導く無限の空

【Zコード】

Z3409Y

【作者名】

合歡の木

【あらすじ】

魔法の天才でありながら、劣等生として過ごしていたナギ・スプリングフィールドは魔法学校を中退し、旅にすることにした。別の世界では一人でのスタートだったがここでは違う。隣にはこいつがいる。無限の可能性を秘める一人は、どんな道を、空をいくか。

Prologue 一人のある日（前書き）

処女作であります。未熟者ですが、「作者よし、読者よし、世間よし」の精神で参りたいと思います。

Prologue 一人のある日

「」はウェーラルズ、

「」！

イギリスの山奥の、自然にあふれた平和な村。

「パパパパパパ！」

ここには常識として、この世界には存在していないとされている魔法使い達が住んでいた。

「カツ！ ドドガガツ！」

そして今その平和な村の片隅で、郷の妖怪達の「」遊びもかくやと思われるほどの弾幕戦が繰り広げられていた。

「今日は俺が勝つぜ、マキナ！ 今日はとびきり調子がいいんだ！」
魔法の射手「連弾・光の41矢」！！

「む、なんの！」魔法の射手「連弾・水の41矢」！

光弾と水弾がぶつかり合い、打ち消しあつて、その余波が地形を変えていく。

その弾幕戦の中心にいるのはあざやかな赤い髪の少年と、蒼い髪にこれまで蒼い瞳の少女。

「生憎、こっちも調子がいいよー」連弾・砂の13矢！ー！

「おわつ、今度は砂か！ いよいしょー！」

砂弾が少年を襲うが高く飛び上がることで回避した。

「ナギ！もうすぐ5時になっちゃうからこいで決めさせてもうつよ！』『フォルテース・フォルトーナ・コウアエト、来れ地の精、花の精、夢誘つ花纏いて蒼空の下、駆け抜けよ、一陣の風《春の風》』

少年は少女がこの勝負を終わらせようとしていることに少し寂しさを覚えたが、力比べは彼の大好物なのだ。

「おひしゃ、やべー！」マンマンテロテロ、来れ雷精風の精、風を纏いて吹きすげ南洋の風《雷の暴風》『一』

ドン！！！

先程までの比にならない威力のぶつかり合い、そして両者の顔に浮かぶのは心からの笑み。しかし、そこでいき場をな

ドードー・ノーノー

二人を吹っ飛ばした。

~~~~~

「いたたた、今日は引き分けかな? ナギ?」

「いたたた、今日は引き分けかな？ナギ？」

「そのようだなー、えーとこれで俺の6勝4敗7引き分けだったかな?」「む、違うよーわたし勝ったの6回だよー。ナギのほうが負けてたよー」

「なにー!俺のほうが勝つてたるー!」

「あ

り得ないよ、だいたいナギはこの前の算数のテスト20点だったじゃん!100点だった私のほうが正しこよー!」

「ぬあーーそれを言つたーーーくすぐつてやる、このーーー

言つたが早いが、ナギはマキナにとびかかって、そのままくすぐりにかかつた。

「キヤーーー!あははははーーーあはーーーしゃはははーーーお返しだーーー!」

「ここかーーーここがええのんかーーー」

「なんだそれーあははははーーーやめやーーー!」

その後はもうもみくちゃだった。さつきまで弾「うー」を繰り広げていた二人とは思えないような原始的かつ平和的なやり取りだった。

しかし、セリード一つ何か起こすのがナギだった。マキナの髪に鼻をくすぐられ、対女性凶悪兵器たる《武装解除》発射態勢にはいったのだ。

「えつーーちゅちゅーとナギー!」

しかも強く抱き着いている上に真正面だった。

「ぶえつくしょん!」

そして予想通り、マキナの服の上半身は瞬時に吹っ飛んだのだった。

「キヤ—————！」

しかし、アリで新たに闖入者が現れた。

「いぬるあ～～～！騒がしいと思つたら、やつぱつお前らか～～！ナギー・マキ　ナ！」

ウホールズの雷おじひこと、スタンさんであった。そして彼がそこで何を見たかといつと、

上半身を剥かれてもがいてるマキナに抱き着くナギ。

「スタンさん、これ」「ナギ」

気温が十度低下したように感じた。

「お前は物心ついたときから悪戯魔法三昧、皆に迷惑をかけてきたな。しかし、まだ十にもなりとつてのよつた犯罪に手を染めるとは」

「いやだから誤く「せめてお前にわざわざ迷惑かけさせられた」のわしが引導を渡さなければならんじやう」

自然とマキナを拘束する腕が緩んだ。自由になつた彼女は胸を手で隠しながらできるだけ遠くへ逃げようと一目散に駆け出した。とにかく遠くへ、という一心だった。

そして彼女がナギの断末魔のようなものを聴いて見たものは、スタンさんの拳を受けて夕暮れの赤い空を飛翔するナギだった。

これは後に「千の呪文の男」と呼ばれたナギ・スプリングフィールド、「無限の蒼空の姫」と呼ばれたマキナ・リリエフォルスの旅立ちの前の日常の一コマである。

## Prologue 一人のある日（後書き）

いきなり弱音吐きますが、早速「読者よし」でいれるか不安になつてきました。面白い台詞を考えられたならあとと思います。あと表現力がほしいなあ。

## 一人の資料（前書き）

設定です。ていうか一人の成績ひよ「見るな～～～～！」ドカッ！  
「ナ、ナギ、君一体どこから ガクッ  
「いいか、見るなよ！お前ら絶対見るなよ！」  
「ナギ、それじゃあ絶対見ろって言つているよ! うなもんだよ  
「えつ、なんでだよ、マキナ！？」  
「日本ではそれをお約束つていうんだよ  
「？」

## 一人の資料

メルディアナ魔法学校  
1978年度第三学年  
総合成績表より抜粋  
十段階評価

No. 6

マキナ・リリエフォルス

母国語 10

ラテン語 10

古代ギリシア語 10

算数

社会(新、旧世界総合) 10

調合(知識、実技総合) 10

体育 10

魔法知識 10

9  
魔法実技

10

10

魔力量

A + 判定

適性 水 氷 地 雷

備考

飛び級及びMM高等魔法学院特待生候補

No. 7

ナギ・スプリングフィールド

|             |   |
|-------------|---|
| 母国語         | 2 |
| ラテン語        | 4 |
| 古代ギリシア語     | 3 |
| 算数          | 2 |
| 社会（新、旧世界総合） | 4 |
| 調合（知識、実技総合） | 3 |
| 体育          | 2 |
| 魔法知識        | 7 |
| 魔法実技        | 4 |
| 魔力量         | 3 |
| 適性          | 7 |
| 風           | 4 |
| 光           | 2 |
| 雷           | 4 |
| A + 判定      | 7 |

## 一人の資料（後書き）

あれつ、て思つた箇所もあつたと思いますが、その理由は後の話にて。

長くなりてしましました。あと、前半読み辛いです。  
今回、戦闘シーンはありませんでしたが、オリジナル魔法がでてき  
たのであとがきに説明載つけました。拙作ですが、どうぞお楽しみ  
ください。

とある教師SIDE

ドパパパパパパ！

遠くから聞こえてくる何かがぶつかり合い、破裂しているような音を耳にして、その教師 もといナギがいるメルティアナ魔法学校の第四学年主任は今日何回ともしれないため息をついた。

——また何かを起こしているのか、あの子らは。

思えば二年前の入学式、あれがすべての始まりだった。

当時まだ五歳だったあの子らは十五名の入学者のなかで一際目を引く存在だった。

ナギは女の子と見間違えるほど纖細で愛くるしい顔を一囗々と咄に向け、元気を振り撒いていたし、マキナはナギと対照的におとなしくしていたが、今までこそあのような快活な子になつたが、そのときは五歳児らしからぬ張り詰めた雰囲気とその巨大な魔力をだだ漏れにしていたおかげで彼女の周りはそこだけ陥没しているかのようには寄り付かず、また、固く閉ざされた彼女の唇がより圧力を強くしていた。

彼女自身は最上級の人形造りの最高傑作にもひけをとらないである容姿をもつて、いのにもかかわらず。

しかし、そんな中、マキナに近づく者がいた。

——ナギである。

彼は最初からのべつくまなく声をかけていたが、自分と同じ異常な魔力量を感じたからなのか、このときはワクワクした顔だった。

「ねえ、君名前はなんていうの？」

「 ！ キナ」

「 え？」

「 マキナ、マキナ・リリエフォルス」

「 そつかあ、いい名前だな！」

「 ありがとう。 あなたの名前は？」

「 俺か！俺はナギ・スプリングフィールド！最強の魔法使いになるんだ！」

「 最強の？」

「 うん。」

「 フツ」

彼女は鼻で笑つた。

「 なつ、なんで笑うんだよこのやるーーむきーーー。」

当然、ナギは怒つた。 そしてとびかつた。

「 やめなさい。 このクソガキ。」

「 うがーーー。」

どつちも年齢的にガキであった。

そしてそのまま倒れた一人はマウントポジションの取り合いを始めた。

「いじらー！やめなさい！」

が先生の横槍が入った。

が！

「つるさい！」

「邪魔」

「あべしつー！」

魔力の籠つたパンチとキックが一人から炸裂した。

成人たる教師が五歳児のパンチとキックで飛んでいく、さぞかしシユールな光景だつただろう。

そう、何を隠そう、そのときかつ飛ばされた先生というのは、この私である。ほかの先生達はこの後、私を除いた総出で一人を取り押さえ、入学式のあと、1時間にわたつて説教をしたそうだ。なぜかマキナは笑みを浮かべていて、彼女の両親からはとても驚かれた。

そう、ここからだつたんだ

。

それから彼らはいつも二人で行動、もとい悪戯を始めた。2年の初めの魔法実技で、二人合わせて62本の『魔法の射手』を出して、学校の一部を破壊したり、先生が体育で跳び箱で模範を見せたときにマキナが作つたという小型魔法地雷（逮捕もの）をマットにナギが置いて踏ませ全治1週間の怪我を負わせたり、村のど真ん中で『雷の暴風』をぶつけ合わせて道路や建物を破壊したり、『アリジゴクゴつこ』とやらをやりたいがためにマキナが大魔法『砂の大渦』を発動し家を数軒飲み込みかけたりと、もはや悪戯というよりはテロを数え切れないほどやつた。マキナの両親はマキナを笑わせてくれたナギ君を信じる、と言つて全く介入してこない。

マキナを笑わせたことに感謝しているのは本心らしいが、あれは絶対面倒事をこっちに全部押し付けやがりなさっている。

「はあ  
」

またため息をつく。

「二人とも本当は素直で優秀な生徒なのに。。」

これにはほとんどの教師は賛成すると思う。

二人は良くも悪くも正直で、悪事をはたらいたときは嘘をつかないし、クラスメートや教師をよく褒めてくれる。まあ私がよく言われているのは

「あははっ、先生って結構丈夫だなー」 BYナギ

なのだが。

それに二人とも魔法使いの素質は最高と言つてもいい。マキナはいわゆる天才であり、ラテン語や古代ギリシア語も今まで習つたことは完璧に習得している。実技も優秀で、この前の模擬戦では先生が5秒で気絶させられて

○→○をしていた。

ナギも学業はまあ残念だが、これまた魔法実技では先生を圧倒していた。というかナギの成績が悪いのは教壇や先生の椅子にまで地雷を仕掛けるからだと思う。

おかげでマキナに比べて教師陣には非常に受けが悪い。

そこまで考えると、いつのまにか音が止んでいたことに気づいた。おそらくスタンさんが止めてくれたか、ただ飽きただけか。前者であることせつに願う。

そんなことを考えながら、私は帰り支度を始めたのだった。

「……で、どうかこれ絶対虐待だろ、この鬼、悪魔、変態、犯罪者……」

ただ今ナギとマキナは罰を受けている。しかしそれは何か誤解を生みそうな光景であった。

二人して簾巻きに逆さ吊りになつてゐるのだ。

さながらそれは日本が生んだ架空の天才柔道家姿三郎の「シンシ」ンのようである。

」

その執行人は全くの知らん顔で鼻歌を歌つていた。

「てめえ、絶対楽しんでるだろーーー村の蟲やーーーん、 ここに犯罪者がいまーーーすーーー！」

外から「またあの子たちか」「よくやるね」「ママー、あの子たちなに」「しつ、見ちゃいけません」などと聞こえてくる

「ナギ、私たちはこの状態になることもう一〇回だよ。もうベテランだねー」

「いや馬鹿だろお前」

「ナギだけには言われたくないよ」わい

「うがー！」の一！

怒つたら、ただちに行動した。それがナギ、逆さ吊りの状態で勢いをつけてマキナに頭突きをかました。

「 い つ て 一 一 や つ た な い の や ね ～ ！

マキナも負けじと正確にナギに頭突きをかます。  
頭突きの応酬が続く。

“**ハシ**” “**ハシ**” “**ハシ**” “**ハシ**”

はつきり言つて音だけ聞くとかなり痛々しい。

しかし当の本人たちは

「キヤツ、キヤツ」

「おつまみおつまめ」

痛みなどないかのように頭突き合いを楽しんでいる。

しかしあつぱり痛々しい。

スタンさんは見ていていたたまれなくなってきたので、とりあえず一人を下ろしにかかった。

~~~~~

「あー、やっと下ろさせたぜー、俺たちの作戦勝ちだぜー」

「つだつだつだつ！」

「ううードラ もんがー今日はノビタが雷に打たれるオチだつたの

「ウニタリ」

当然、反省の色はない。

「ふつふつふ、俺「私」たちを下ろしたのが運の尽きだ～」

「なんじゅとー？」

「ぐひえー！」

「ドラ もんの仇！」

「「ナギマキダブルキイック！！」」

「あぶろぼあーーー！」

そしてさりげなく杖回収する一人。

「バハハ～イ、スタンさん」

夕日を浴びて帰りの道をゆく一人。

後に残されたのは、一人のキックで腰をやられたスタンさんのみであつた。

「覚えてるーーーお前らーーー！」

「やひれ役のセリフおつーーー！」

「お、ぼ、え、て、ろ ガクツ」

これもまた、日常なのであつた

魔法・技・魔法具説明

『砂の大渦』

任意の場所を砂に変え、そりと渦のよつに砂を回転させ、相手を地中に引きずり込む魔法。

あまり使う人はいないので比較はできないがマキナが発動させたものは直径50mほどの大きさだった。滞空するすべをもたないものなら、ほぼ脱出は不可能。れっきとした広域殲滅魔法。ちなみに上位古代語魔法。

『魔法地雷』

ネギま！24巻に登場した対軍用魔法地雷の超小型版。マキナはナギが使つたものよりもさらに弱めたものを悪戯用として販売自由になるレベルまでにして特許をとつた。そこそこ売れて、マキナはホクホクだが、MM元老院に目をつけられたことに気づいていない。

『ナギマキダブルキック』

こめられた魔力は関係ない。ただそこに怨み じゃなくてハートがあれば立派な必殺技。

UNDER STORY 1 赤毛の問題児のとある決心（前書き）

短いです。ちょっとした幕間なので。しかし、一人の運命が動き始めるのは確か。

ナギ SIDE

俺はナギ・スプリングフィールド、最強の魔法使いになる男だ。

こいつ言つたら、大概の奴は笑つた。

でもそういう奴も、俺の魔力をちょっと解放してやれば、すぐに黙つた。

だが、一人だけ、違う反応をしたやつがいた。

間違いなく、俺の一番の親友で、そして、最強のライバルであるマキナ。

あいつは俺の言葉を聞いたとき、笑つたといえば笑つた。
しかし、鼻でだ。

あいつは田で語つていた。
お前じや無理だ、と。

すげえ嫌なやつだと思った。

でも、違つたんだ。

あいつは頭がいいことを自慢しなかつたし、できない俺を馬鹿にしなかつた。それどころか、勉強でわからんねえところや、どこから知つたのか、先生も使えないような大魔法を俺に教えてくれた。

いいやつだった。

いつしか俺たちはいつも一緒にいるようになり、
悪戯をしたときはセシトで叱られて、なんか嬉しかった。
この前裸のあいつに抱きついたとき、すげえいい匂いがして、
つい抱きしめちゃった。

でも次の日になつたらこつもどおりで、なんかくやしかった。

今は、屋上に一人でいる。

今日、この前の悪戯のことで、先生にこんなことを言われた。

「またマキナくんを巻き込みおつて！彼女は『偉大なる魔法使い』
になる可能性が高いのだぞ！いつもいつも無理矢理つれまわして
彼女の将来がめちゃくちゃになつたらどうする？..」

あのやういは人を点数だけでしか人を見ようとしない嫌なやつだ。
それに無理矢理つれまわしてなんかない。

でも、あいつ、マキナの人生がめちゃくちゃになるのはいやだ。
あんなに頭がいいのに。俺と違つて魔法をたくさん知つていて。
そういえば、俺はいつもマキナの魔法の話を聞いて、それを確かめ
ようとしたから、こつも騒ぎを起こしてた。

あいつからせざつとしたことなんて、一度もなかつた。

思い始めるところがない。

俺はこのままだと、本当にマキナの人生をめちゃくちゃにしてしまうかもしない。

——もう、どこか、

マキナのいないところへこうか。——

このままじゃ迷惑だ。

それに、もう学校はうんざりだった。

魔法が好きで、マキナがいたから来ていたようなものだし、未練はない。

そうだ、旅に出よう。

でも、最後にもう一度、

本気でマキナと戦いたい。

UNDER STORY 1 赤毛の問題児のとある決心（後書き）

ケータイ投稿つて時間がかかります。

さあさあ、次は真剣なバトル回です。

そして

はたして、 どうなるのか。

相変わらずの半端者の作品ですが楽しんでくださいませ。プロロー
グ、終了です。

その日、マキナは不機嫌だった。

そり、名付けて『スタン（さんの腰に）グレネード事件』から12日。

別にテストの点がわるかつたわけではない。

ていうかそんなものいつも100点だ。

悪戯がつましいかなかつたわけではない。

先生に怒られたのでもない。

てこうかそんなの痛くもかゆくもない。

そり、もう一2日たつのだ。

次の悪戯が全く始まらない。

ナギが前の悪戯から一週間以上たつてて、このひどいことも起こさない。

退屈でしうがなかつた。

もつとも、教師たちはこのじまじの安穩に漫ることなく、常に気を張つてゐる。

少し憐れである。

そして、もつとも氣にいらなかつたのは、ナギが学校に来ていない

」とだった。

もう4時間だ。

もうすぐお腹になつてしまつ。

ナギはこつも遅刻はするが、お腹までしきゃんと来た。

そう、お腹」飯と一緒に食べながら、次の悪戯の構想を練る。

それが一人の日課だとこいつのこと。

「 ちやご、マキナちやん！」

「 ほみやあー?え、な何ー?」

「 (か、可愛こ、じやなくて-) もう授業終わつたよ。マキナちやん。」

「 え、あれ、本当だー!ありがとーーと、け、ケンくん?」

「 (やい、疑問形?) あつひるよ」

「 それじやーねー」

「（展開早っ…違っ…今日はチャンスかもなんだ…）あの、マキナ
ちやん…」

「んー？」

「あ、今日一緒に昼食べない…？」

マキナは考える。

いつもならナギとの悪戯会議なのだが、今日はいない。

でも毎日話していたせいか、なんか一人でいる気分にはならない。

「こいつもナギにやつてこるよひの昼を食べながら魔法講義と
しゃれこむつか。

「うそ、こむかー」

「（やけにアソシコン高になーケン・アントベーー）」

相手の挙動を考えるとどうやっても鈍いとしか思えなことづな」と

を考えながら、マキナは食堂へ向かつたのだった。

ちなみに、マキナをお前に誘つた男の子の名前は
ケント・アンダーソンである。

彼の苦悩は推してしるべし。

さらにいうとこの後予定通りお昼ご飯がてらマキナの魔法講義が行われたわけだが、彼にはあまり理解できず、ほほあいづちをうつことしかできなかつたうえ、食堂にいたクラスメートや下級生が聞いて集まつてしまい、完全に一人きりではなくなつてしまつた。

また、その場にいた子の

「先生よりわかりやすい」

「おれの発言で、教師が手をした。」

だが、その様子を、窓から覗いていた赤毛がいたことは、誰も気づかなかつた。

そして
結局、
ナギは来なかつた。



マキナは自分の部屋でその夜、考えていた。
なぜナギが来なかつたのか。

ナギの家に行つたら、今朝はいつも通り学校へ行つた、と言われた。

敢えてナギが学校に来なかつたことは言わなかつた。

なぜ、なぜ、

私にも秘密でなにを、

コツ、

窓から音がした。

コツ、

また。
窓の外を見下ろす。

ナギだ。

クイツ

指で「ひち>」、と。

~~~~~

マキナはナギに言われるままについていった。杖を持つて。

着いたのは、いつも一緒に戦っていた場所。

村の片隅の、なかなか邪魔がはいらない、

「どうしたの? ねえ、なんで今日来なかつたの?」

「ナサム」

いつものナギと全く違った、真剣な顔。

「な、何？」

鼓動が速くなる。

「俺と」

「う、うん」  
唾を飲み込む。

唾を飲み込む。

「 本氣で戦つてくれ」

「 はい?」

「 」の時間の「」の場所なら邪魔ははいらない

「いや、モーじゃなくて」

「頼む」

「 意味も何もわからないけど、いこよ。『ちょっと死ぬかもモード』でいく

「ああ」

互いに杖を構える。

瞬間、

「 「《戦いの歌》」」

先にしかけたのはマキナだった。

技も何もないが、明らかに人の限界を超えた速さを伴った拳がナギの顔へ向かう。

しかし、ナギは平然と腕で受けた。

「やつぱ普通に防いだね！さすが！」

「当たり前だ。初めて戦つたとき、それをこぎなりやられて負けたからな！『白き雷』！」

「（無詠唱！？）うわつー！」

バリツ！！

すぐにナギからの反撃がきた。ナギの手に閃光がほとばしり、雷撃は虚空に消えた。

「（今は障壁なしでへりつたら、ちよつと無事で済まないね）じ  
やあ、せひこ速くこくよー。『戦いの旋律 加速3倍拳』ー。」

先程の『戦いの歌』のときよりも遙かに速い速度でナギに突っ込む。

「解放」

光の奔流がマキナを襲つた。

辺りの地形が変わっていく。

「げほつ、がはつ、（数発もらつちやつた！今のは遅延呪文の『魔法の射手』？でも軽く50本超してたよ！？） あははははは！ナギ、すごーい！さすがに今のは予想外だよ」「マキナ、本気で戦つてくれ。これが最後なんだから！」 何が？もしかしてこれでお別れとか？だとしたら笑えないよ？ていうかいきなりにも程があるよ？」

「 」

「 なんで？」

声が震える。

「 勝つたら教えてやるよ

「 忘れないでよー！フォルテース・フォルトーナ・コウアエト、『集え、深きより来たりて十重二十重と回り、彼の者を飲み込め』《磊らの車輪》！」

ゴ ゴ ゴ ゴッ！

数百もの石の塊が車輪のよつに回転してナギへ向かう。

「マンマンテロテロ『光の精靈 119柱、集い来たりて敵を撃て』《魔法の射手 光の119矢》』」

物量対物量。

ナギの光の弾幕が石の塊にぶつかり、削られた石のかけらがマキナ

の視界を遮る。

「くっ、『氷爆』！」

ドッ

爆風が石のつぶてを吹き飛ばし、視界が晴れる。  
が、

「（いない！？　いや、上か！）」

ナギはよく模擬戦で上からの奇襲をよくやった。

「マンマンテロテロ『影の地統ぶる者、スカサハの、我が手に授け  
ん、三十の棘もつ靈しき槍を『雷の投擲』』」

ゴッ！

「（今度は破壊力が大きい『雷の投擲』！視界を遮つて避けにくく  
した上で攻撃！ならこつちも！）フルテース・フルトーナ・  
ユウアエト『来たれ氷の女』『戦いの旋律 加速・強化2倍拳』」  
ガッ！？」

「油断したなー」この勝負、俺はぜつてえに負けられねえんだーこの  
ままいかしてもうつぜー！」

ゴッ ガガッ ドスッ

顔に、腹にナギの拳がささっていく。

「（強い。今までのナギよりもずっと。それに、今は私だけを見ている。でも、嬉しくない。だって、だってさー）」

「これで、終わりだ！『戦いの歌最大出力』！」

「拳に悲しみしか伝わって来ないんだもん。」

ドカツ！！

『戦いの歌』でもなんでもない、ただ魔力を籠めただけのパンチが

完璧なカウンターのタイミングでナギの顔にはいつた。  
ナギは昏倒した。

~~~~~

「治癒」

ナギの傷もすべて治した。あとは起こすだけ。

ガバッ

と思つたら起きた。

少しの間呆然としていたが、ナギの目に涙が溢れてきた。

「 そ、うか、俺、負けちまつだんだな 」

「 なんださ、なんで最後だなんていったの！？なんであんな危ない戦い方しても勝とうとしたの！？」

「 決着、ズズツ、づげだがつだ 一人で最強の魔法使いになるためにさ、俺、今日、この村をでていこうと決めたんだ。」

「 なんで 」

「 俺さ、バカだろ？いくら悪戯してもさ、別にいいと思つんだよ。バカが不良になるだけだから。でもさ、マキナは違うじゃんか。頭いいし、悪戯やつてるけど授業は真面目にやつてるしさ。お前は絶対『偉大なる魔法使い』よりもすげえやつになると思うんだ。でも、俺のやつてる」と元巻き込んでたら、そうなれなくなつちまつと泣いてさ 」

「 はあ～、うん、いつものナギよりもバカだね 」

「なに！？俺は真剣に考えて 」

「私さ、最初はさ、魔法なんてのは捨てて使えない人っみたいに生きようつて思つてたんだ」

「えつ 」

「だつてさ、外では魔法つて秘密なんじょ？こんなもの知つてたら一生自由じやいられない そう思つたんだ。なんだか、生きる道がとつくに決められている気がして」

「 」

「だから、初めてナギの言葉を聞いたとき、本当に愚かだつて思つた。余計に自分を縛るつとしているように見えた」

「違う！」

「 そう、違つていたんだ。ナギはいつも魔法で悪戯ばかりだつたけど、人助けだつていつぱいやつてた。だからわたしわかつたんだ。魔法を使うのは決められたことだけど、どう使うかは人次第。大切なのは自分で決めるこじやなくて、『えられたものも、自分で決めたことと一緒に抱えて自分の進みたいところを目指すことだつて！』

「 」

「ナギの夢は、わたしの夢にもなつた。ナギが今の私をつくってくれた。わたしのこれからも、ナギがいたからできたんだ。だから、

「一緒にいいな

「俺はこの村をでる。もう決めた」

「ナギ そう、それがナギの進みたいところなら

「だから一緒にきてくんね？」

「ふえ？」

「俺もマキナと一緒にいい

「うんー喜んで！」

「おしつ、これからもよろしく、相棒！」

二人は握手を交わした。

ガサツ

「うひーっ！？」

茂みが動いた。

そして、現れたのは！

「ふ〜〜、話はすべて聞かしてもらつたよ〜お兄ちゃん、お姉ちゃん」

オゴジヨであった。

「えーと、しゃべつたつてことはオゴジヨ妖精?」

「わ〜、わすらこのオゴジヨ、シルフィ・レルフィとはわたくしの」「とな〜」

「舌回つてな〜」

「ひらひらふですね〜お一人しゃん」

むんず

マキナがシルフィを掴む。

「やあ〜」「待つわ〜〜

」（ひ、ひらひら）ちゅうとマキナ、まわらこの話しあいひす

「で、何の用?」

「わたちも連れてつて〜」

「魔法は?親御さんは?」

「わたしひは天才だからす」¹「い使えりゅー、パパヒママヒは先週別れ
た」²

「よし、採用」

「いや、いいの?ナギ」

「それがここのの」³

「進みたこと」⁴「うつへ」⁵「うね。じゅあ、わたし支度してへるねー。」⁶

~~~~~

「お待たせ!」

「おひー!こへぜー!」

「ひへひひひひひ?」

「無論杖でー!」

「あのーわたし乗れる杖じやないんだけど」

今さらだが、マキナの杖は初心者用のやつである。

「何言つてんだ。後ろ乗れよ」

「あ、うん。  
『ああ』

「（あ マキナの心臓の音が） よし、シルフィイも

「つよ～か～い

「おひしゃあ、れつひひ～」――。

「オッ――

「うう～、一人と一人の旅、もとい伝説が始まったのであった。

「ヒーリングついで駆け落ちでしゅか～？

むんす

「ああ、」――からだとシャツにならなくていいや。

とにかく、彼らの旅路に幸多からんことを。

『轟轟の車輪』

呪文の通り、多数の石を一塊にして車輪のよつに回して相手を攻撃する魔法。実は制御がけつこう難しく、サイズを大きくしていく。

## Load . 1 メタモルフオーゼ (前書き)

タイトルのとおり、変装回です。容貌描写って難しい  
どうも  
お楽しみください。

## Load・1 メタモルフオーゼ

旅立ちの翌日。

ただ今ナギ一行はロンドンの空を飛行中である。下の都市には人がたくさんいるが、シルフィイが認識阻害の魔法をかけている。ちなみにこの認識阻害の魔法は、魔法の存在の秘匿が一般の世界に住むときの最優先事項であるので、魔法学校では入学してすぐに教わる魔法の一つであり、初步の初步でもあるので、オコジョ妖精でも扱える者は多い。

しかし、あくまで一般人に対してもうものなので、

「あーっ！ちくしょう！魔法使いに見つかっちゃった！」

「ナギのバカ！だからちょっと危なくとも低空飛行でいいってと  
！つーか歩いてもよかつたじゃん！」

といふことになる。

ロンドン。

「霧の都」とも言われ、

かつては国際金融市場の中心地であった、イギリスの首都。人口は700万人を超す。

全国各地からの鉄道、交通機関が集まっているので、多くの人が訪れ、住み着く。魔法使いとて例外ではない。木を隠すなら森の中、ともいうし。

魔法学校の卒業生の修行先にもよくなる。

したがって、それだけ魔法を知る者も多い。管理もしつかりしている。

だから、見馴れないやつがくればあつそりばれる。

「どうするの！？次見つかつたらウーハー・ルズへ強制送還かも～！？」

「いや俺こんなにたくさんの人見るのは初めてよ～」

「あほ～！」

「「」元ままじゅお一人の愛の逃避行が～！」

ガシツ

「そお～」「だからしょれやめちえ～！」

愛のなんとかはどうでもよろしかわい。

確かに、魔法使いに見つかったのはナギがまるつきつお上りさん状態で、高く飛んでキヨロキヨロして、時計塔をもつと近くで見ようとしてそこを管理していた魔法使いに鉢合わせしてしまったからなのである。後ろにつかまつているだけのマキナにはどうにもならない。

「とにかく、これからはこのままの姿じや駄目だと思つ。そこで

「ん？」

マキナが魔法鞄に手を突っ込む。

ガサゴソ

「年齢詐称薬」

ぴか

「これを食べると幻術の作用で身体を大きくしたり、小さくしたりできるんだー。一粒18ドルでいいよー。ナギ太くん」

「誰がナギ太かつ！つーか金どんのかよ！？」

「シルフィイにはこの種族詐称薬だよーこれを食べると人間に変わるよー」

「スルーかいつ！」

「あれ、シルフィイ、どうしたの？」

「……わたちはこのままいいでしゅ。ていうか今食べたら全裸の人間が出現するでしゅ」

「つーかなんでんな便利なもん使わなかつたんだよ？」

「いや、ナギはオコジョ以下なの？今シルフィイが言つたじやない」

？」

「「服がない」でしゅ」

「あつ！」

「そりだよ、今ナギがこれを食べたら、少年用の服を着た青年が出  
現する。しかも運が悪ければ服が破けてナギの おち がでて魔  
法使いの前に警察につかまっちゃうよ」

「うおいつ！？女の子がんな発言すんなー！？」

「いやね王で、お前服を買おうが、お金あるかね?」

「ねえ、は？」

俺は金持つてねえ／＼！文無した＼＼！

えええええええ～！？

衝撃の甲斐性なし発言でしゅうべー！」「

- うるせー！

「なんとかなると思つてたWW！」

「バカWすごいバカがここにいたW W ! !」

{} {} {} {} {} {} {} {}

「はあ、しようがないね。ナギの服代もわたしがだすよ

「すまん」

「じゃ、一旦杖から下りて服屋探そ」

「ヒカル、アキナつけて金子へりである。」

「だいたい3万ドルくらいかな？」

ၯ

「ええ～！？9歳児が持つ額じやねえ～！」

「おお、ナギがもつともな発言ーていうかさつきから驚いてばつかだね、私たち」

（あらかじめ前書きまじかかくに悪魔用にリバーリクションさせた魔法地雷の特許をとつてかなり金を儲けました。）

~~~~~

そして、そこそこ大きな店を見つけた。しかし、またもナギがやらかしかけたのである。

「（あれ、この店のドア、取っ手がねえぞ？もしかして、ここに魔法使いの拠点があつて魔法使いにしか開けねえんじゃ）」

と、自動ドアの存在を知らなかつたナギの邪推である。

緊張の面持ちで一歩踏み出す。

ういん

ドアが開いた。

（ 騰、か。マキナを騙してもこの俺の皿せうまかわねえぞ。）

11

「
はい?
」

「だが、向こうが入れてくれるつづーなじーひちからこいつにやるぜーーーうおーーー！」

T, T, T, T, T, T, T, T

ガシツ

「ベネッセー？」

「マキナはナギの首ねっこを思い切り掴んだ。

「こや向やつてんの？」

その後、マキナはこの世界には自分たちの魔法と同じように「科学」なるものがあると教え、あのドアが動くのにもそれを使っている、と教えた。

つーかこのへらい教えとけよ、ナギの親御さん。

「とこづわけで、着いたよ。ここが試着室。」

マキナはテンション高めである。初めて自分で服を買えるからか。

「じゅあ、この中で年齢詐称薬食べて試着すんだな

「やつこひと。お披露目は後で！覗かないでね！」

「バ～カ。誰がお前の貧相な『『加速3倍拳 乙女パンチ』』、ぎやばつ！？」

「もつ、ばか～！絶対、やふんと言わせてやるんだから～！」

ジャッ

試着室のカーテンが閉められ、後に残っていたのはこの女の怒りをその顔いっぱいに受け倒する少年のみであった。

ていうか9歳児にグラマーを求めるのは酷ではないか。ナギよ。

~~~~~

「いつでも、あんなこと言つただけで魔力パンチつてなんだよ、  
ちくしょー」

ナギはいまだ痛む頬をさすりながらつぶやいた。

マキはとくに自分の服を決め、それを着て店の外で待っている。いまだにマキナは服を選んでいるようだ。

ナギ9歳 女子の買い物の長さを初めて知った  
そんな彼は、もう一つ面倒さを感じる事態に直面していた。

やたらと声をかけられるのだ。主に女性に。

今のナギは年齢詐称薬によつて15歳ほどに変化しているのだが、それにしては背が高い。177cmほどであろうか。スマートだが体つきはがっちらりとしている。幼さが若干残つているが顔立ちは整つて、田元はつり田がちだが凜々しい。

ようするに今のナギはかなりハイスペックなイケメンである。

「あの～すいません。お一人でしょうか？」

また一人。

「いや、人待ってるんだけど」

今までの女性は「」でがっかりしたような顔で退いていったのだが、

「あ、じゃあ今までどのくらい待つてます?」

「え、こ、20分くらいかな?」

「じゃあ多分まだ来ませんよ。その間ちょっとお話ししませんか?」

「いや、いいよ。うちの都合もあるだろーし」

「いいえ、構いません」「お待たせ~!ナギ待ったでしょ?」「ごめんね  
~」

ようやく買い物が終わつたようである。ナギの背後からマキナの声  
が聞こえた。

「あれ?」

突然無言になつた女性に困惑ナギ。

「 し、失礼しました」

そして足早に立ち去る女性。

「つたく、なんだつたんだあいつ? つーか遅かつたじゃねえかマキ  
」

振り向いて、一瞬呼吸が止まった。

えらい美人がそこにいた。いや、マキナに違ひなかつたのだが。

肘の辺りにまで伸びた青い髪にぱつちりと大きな目。引き締まつた唇に真珠のよつて白い肌。

しかし、一番ナギを黙らせたパートは

ゆさつ

と擬音が聞こえてきそうな大質量の胸であつた。  
15歳の質量じゃない。

しかも、マキナの「コーディネートは紺色のボディースーツに七分丈のベスト、そして左足側の太ももから下を切つたジーンズといつ、けつこうつ刺激的な服装だ。

「ビーだ〜、ほらナギ〜、誰が貧相だつて〜？」

「

「あれ？ おーい、ナギ」

ずっとマキナの胸部に釘付けである。

「ナギちゃんはマキナちゃんのおつぱこに夢中でしゅ。よかつたでしゅね。」

「つば、ばかっ！ 確かにちょっと見せびらかしたかったけどそこまで見ろとは言つてない！ 『加速3倍拳 乙女パンチ』！」

「べげるあつー！」

ようやくひいた頬の痛みをまた再発させたナギであった。

~~~~~

「一九三二年」

ナギはいまだに悪態をついている。

「どうかセーナギはなんでアロハシャツなの？」

ナギは店のどこから見つけたのか、ズボンはいつも着ていた黒一色のやつの大きいサイズのものであるが、上は紅葉柄のアロハシャツである。

「いや、なんかびびつときてな！ いーだろこれ」

確かにそれは色彩のバランスがよかつたし、赤を基調とした柄は赤毛のナギにあつてゐる。しかし下と合わないし、目立つ。

なんかこーいうのって『日本的』なんだと

アロハシャツは田本的な柄がけつこう多い。

てもそれにそれとして

「それにしてもまあかつこよくなつちやつたね～ナギは。ほら、服は変だけど皆ナギを見てるよ」

「なんかひつかかるけど、サンキューな。マキナの金で買ったん

だし

「いーだ。将来三倍返して元してもうつかひ

卷之二

「うわー、マキナちゃん高利貸しへ」

そういうマキナもかなり視線を集めている。男女問わず、顔、そして胸に。

「なんか変身前より目立つているね。杖使つのはもうちょっと人が来なさそうなどじろにしよ」

~~~~~

「どうわけで、今出発だよっ!」

普通の路地裏である。

よくわからない方は『魔女の宅急便』にてきた町並みの細い路地を想像していただきたい。

「よし、シルフィイ！認識阻害魔法オツケーか？」

「オッケーでしゅ」

「じゃあ出でます」ナギ、これから予定なんだけど、決めてないよ

ね？」

「ああ

「さつきのアロハシャツの柄で思いついたんだけど、行き先は日本にしない？」

「 なんで？」

首を傾げる。

「日本はね、アジアでも屈指の魔法使いの中心地なんだって。でも、もとからある呪術とかなんとかがあつて国内で勢力が伸ばせないんだって」「

「つまり、魔法とは違う戦い方でつえーやつがこるつてことか、ワクワクするぜ！」

「魔力を使わない一般人用の戦い方もすこくつて、ときどき魔法使いに勝つちゃう人がいるつていうし、すごい興味があつたんだ。いいよね？日本で」

「おうーおっしゃー待ってる日本！乗りな、マキナ、シルフィー！」

「うん、つて大きくなつたからちょっと狭いね 『ぎゅ』

むにょん

ナギの背中に、極上のマッシュマロのような感触が伝わつた。無論、マキナの胸部。

むにむに

ドムラン・!

「えつ、ちよつ待つ  
速過ぎいいい！」

そりで強くしがみついてキナ。

「うおおおおおーーーー燃え上がるぜえええーーー」

ナギ9歳。新しい『魔法』を知つたのだった。

そして、駆進するナギ一行が目指すは日本ではなく、ちょっとずれてギリシャ。ていうか地図持ってるのだろうか。こいつら。

果たして、そこに何が待ち受けているのだろうか。

「いーかげんにしなさい！」

ポカツ

「くみゅう！」？



技説明

『乙女パンチ』

ネギま！単行本8巻にでてきた悪魔ヘルマンが『悪魔パンチ』なるものを繰り出していたが、それとは関係ない。単に『戦いの旋律』に乙女の怒りをのせただけの一撃。ギャグ補正がかかるので、ナギはある程度平気だが、一般人がくらつたら、多分即死。アーニャの『フレイムナックル』的存在。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3409y/>

---

英雄を導く無限の空

2011年11月20日14時01分発行